
ハヤテのごとく！～僕はヒナギクさん～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！～僕はヒナギクさん～

【Nコード】

N0845F

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

屋敷の前で西沢歩に撥ねられたハヤテは、負け犬公園でジョギングをしていたヒナギクの頭にぶつかり、精神が入れ替わってしまい

……

第01話：入れ替わった二人（前書き）

誰でも一度は異性と入れ替わってみたいくなる1話。
「僕はこれからヒナギクさんとして生きていきます。b y ハヤテ」

第01話：入れ替わった二人

水色の髪に女顔の少年、綾崎 あやさき 颯 ハヤテ は、練馬の東側に位置する広大なお屋敷で執事をやっている。

その日の朝、彼は屋敷の主である金髪ツインテールの女の子、三千院 せんいん 凪 ナギ にお使いを頼まれた。

「ハヤテ、先日発売したDS版のドラ エ5を買ってきてくれ」

「解りました。大至急行ってきます」

ハヤテはそう言って、屋敷を後にした。

とは言っても、今は8時丁度。店は10時にならないと開かない。
(開店まで2時間はあるな)

ハヤテは腕時計を見て思うと、辺りを散歩しようと考えた。

チリンチリン、と後方から自転車のベルの音が聞こえた。それと同時に、女性の叫び声。

「きゃああああ　っ！　そこ退いてくれないかな!？」

「ん？」

ハヤテが振り返ると、マウンテンバイクに乗った少女、西沢 にしざわ 歩 あゆむ が猛スピードで近付いてきていた。

「ハヤテくん、止めて　っ!」

歩の叫びに應えて、ハヤテはマウンテンバイクを止め……ようとしたが、勢いよく吹っ飛ばされてしまった。

「うわああああああ　っ!」

遙か彼方へ飛ばされたハヤテは、悲鳴を上げながら、負け犬公園のジョギングコースで軽く走っていた桃色長髪の少女、桂 かつら 雛菊 ヒナギク の頭の上に落ちた。

「うつ!」

呻き声を上げて倒れたヒナギクの上に、ハヤテの体が乗し掛かる。
「痛!」

ヒナギクは引き攣った表情で頭を押さえながら立ち上がった。

ドサツと鈍い音を立てて落ちるハヤテ。

「ん？」

ヒナギクがそれに気付いて振り返ると、驚いて飛び退いた。

（な、何で僕が倒れてるんだ！？）

まさか死んだのか、そう思ってヒナギクは自分の体を改めた。

「……………！？」

そして再び驚くヒナギク。

（こ、この長いピンクの髪に赤いジャージはまさか！？）

取り敢えず起こすか、そう思ったヒナギクは、目の前に倒れているハヤテの体を揺さぶった。

「う……、うう……」

薄目を開けるハヤテ。

「誰……？」

ハヤテはそう呟いて目を擦ると、視界の映った人物の姿に驚いた。

「何で私が二人居るのよ！？　言うか私の声低くない！？」

そのハヤテにヒナギクは冷静になるよう指示する。

「落ち着いて下さい、ヒナギクさん。僕です。ハヤテです」

「は？」

訳が解らず、目を点にしたハヤテの懷から、ヒナギクは鏡を取り出して見せた。

「……………！？」

そこに映る自分の姿を見て驚くハヤテ。

「これは夢よ！」

ハヤテは鏡を退かしてヒナギクの頬をビンタした。

ピシッ！　と、鈍い音が鳴る。

「痛！　何で僕が叩かれなきゃいけないんですか！？」

ハヤテはその言葉に、「夢じゃない……」と呟いた。ヒナギクはそれに、「夢でも痛いですけどね」と突っ込んだ。

「それはそうと、僕たち入れ替わっちゃったみたいですよ」

「どうして？」

「たぶん、二人の頭がぶつかった時のショックによるものだと思います」

「どうしてくれんのよ!？」

ハヤテは起き上がり、ヒナギクの胸倉を掴んで睨め付けた。

「そんな事言われても、僕にはどうする事も……」

「はあ……」と、溜め息を吐いて、ハヤテはヒナギクの胸倉を放した。

「取り敢えず、暫く様子を見ましょう。その内元に戻ると思うわ」
ハヤテはすくと立ち上がって去っていく。

「あの、どちらへ？」

「帰るのよ」

「桂家へ、ですか？」

その問いに、ピタツと立ち止まるハヤテ。

「言つときますけど、今の貴方はヒナギクさんではなく、執事の綾崎 颯です。帰る場所は三千院家ですよ」

「うっさいわね! 解ってるわよ!」

「ああ、それともう一つ。帰りにデパートへ寄って、お嬢様にDS版のドラゴン エストゥを買っていつてあげて下さい。じゃないと僕の執事生命がヤバイ事になりますので」

「貴方の執事生命なんてどうでもいいわ」

「僕がクビになっても宜しいんですか？」

ハヤテはその問いに振り返って答える。

「仮にそうなたら私のペットにしてあげる」

「寢床を貸して頂けるのであれば、それでも構いませんが……」

ヒナギクがそう言いながら納得のいかない顔を見ると、ハヤテが疑問符を浮かべた。

「何よ？」

「ペットという立場が気に入りません」

その言葉にハヤテがヒナギクの股間を蹴り上げた。しかし、彼女は微動だにしない。

「残念でした。そこは男性にしか効果が無いんですよ」

ヒナギクは仕返しにはヤテの股間を思いつき蹴り上げた。
「うっ！」

ハヤテは呻き声を上げ、股間を押さえて体を^{よじ}擦った。

「痛いじゃないのよ！」

ハヤテは目に涙を浮かべながらヒナギクを睨め付けた。

「じゃ僕はこれで」

ヒナギクはそう残して公園を後にした。

第01話：入れ替わった二人（後書き）

この物語は、最終的にヒナギクになってしまったハヤテが東宮 康太郎と結ばれてしまう事を目的としています。しかし、当方の一存で大きく路線が変更される可能性があります。その場合は予めご了承ください。

第02話：ラブレター

正午になった。

ジャージ姿のヒナギクは、とくにすることもなく、銀杏商店街を彷徨っていた。

グー、と腹の虫が泣く。

（お腹が減ったな。何か食べよう）

腹の減ったヒナギクは、どんぐりという喫茶店の前にやってきた。やはりここか、そう思いながら、店のドアを開けて中に入った。すると、ハヤテの元クラスメイトである西沢 歩が現れた。

「誰かと思ったらヒナさんじゃないですか」

（えっと、ヒナギクさんは確か……）

「歩、何か食べるものないかしら？」

「何をご希望ですか？」

「何でもいいわ」

「では炒飯でも作りましょうか」

歩はそう口にするのと、厨房へ入っていった。その間にヒナギクは席に着いて出来上がるのを待った。

「お待たせしました」

歩が炒飯をスプーンと一緒にテーブルへ置いた。

「ところでヒナさん。先刻、ここにヒナさんを尋ねてきた人が居たんですよ。確か、東宮^{あすみや} 康太郎^{こうたろう}という名前だったような……」

「何の用だったの？」

「これを渡して欲しいって」

歩はそう言つて、一枚の封筒を取り出した。

受け取ったヒナギクは、それを開封して中から紙を取り出した。

彼女はそれに書かれている恋文に頬を染め上げた。

（何だ、このドキドキ感は？）

「どうかしたんですか？」

その問いにヒナギクは、康太郎からの手紙を歩に読ませた。
頬を赤らめる歩。

「私の胸、ドキドキしちゃったかな。オッケーしちゃった方がいいですよ、ヒナさん」

「で、でも……」

（困ったな。勝手に返事をしたら拙いだろうし、ヒナギクさんに相談してみるか）

ヒナギクは携帯を取り出すと、メール製作画面を起動してハヤテ宛てに送信した。すると、直ぐに返事が来た。

適当にあしらっておいて、そう本文に書いてある。

「歩、私受けないわ。東宮くんの告白は」

「どうして？ ヒナさんが告白にオッケーを出せば、ライバルが一人消えるんだけど」

「……………」

その言葉に疑問符を浮かべるヒナギク。

「あ、そうだ。ヒナさんにお守りあげる」

歩は恋愛成就のお守りを取り出してヒナギクに渡した。

「恋愛成就？ こんなもの貰ったって何の効果も……」

「それがそうでもないんですよ。このお守りはナギちゃんのお友達から貰ったもので、好きな人に告白したりすると、必ず結ばれるという不思議な力が込められてるんです。私も半信半疑でやってみたら、ハヤテちゃんと恋人までとは行かなかったけど、今まで以上に仲良くなれたんです」

（ちょっと待て。僕の記憶では告白されたのは一回だけだし、当時はお嬢様と面識無かったから、それは有り得ない。ということは最近、それも僕とヒナギクさんが入れ替わってから？）

ヒナギクは僅か1秒でその考えに至った。

「えっと、取り敢えず貰っておくわ」

ヒナギクはそう言うと、恋愛成就のお守りを仕舞い、炒飯を平らげて財布を出した。しかし、中には12円しか入ってなく、食事代

を払う余裕は無かった。

「歩、悪いんだけど立て替えておいてくれる？」

「後で倍にして下さいね」

「冗談きついわよ」

二人はクスクスと笑った。

「じゃ私、もう帰るわね」

ヒナギクはそう言つて、喫茶店を後にした。

その頃、三千院家では、ハヤテが部屋のベッド下に隠されているエロ本を見付けていた。

（ハヤテくんも男ね）

ハヤテはそう思うと、クスクスと笑いながらエロ本に手を伸ばした。

「……………！？」

ハヤテはエロ本の内容の凄さに驚き頬を赤らめた。

（こんな刺激的なものを見てるのね、ハヤテくんは）

ハヤテはそう思いながら鼻血を垂らした。

（ヤバ！）

ハヤテはチリガミを手に鼻から垂れる血を拭った。そして、それを詰めて栓をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0845f/>

ハヤテのごとく！～僕はヒナギクさん～

2010年10月9日19時42分発行